



日本臨牀・増刊号

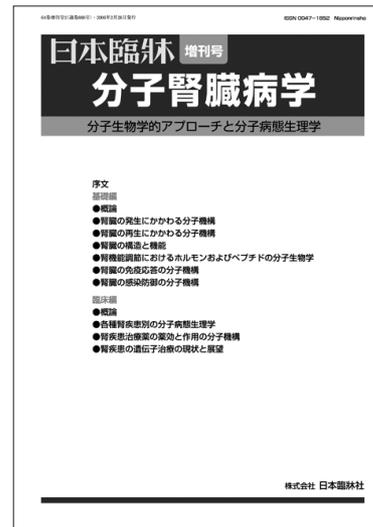
## 分子腎臓病学 —分子生物学的アプローチと分子病態生理学

評者：古河赤十字病院 浅野 泰

月刊誌「日本臨牀」の増刊号(2006年2月28日発行)として、「分子腎臓病学」が発刊された。ヒトゲノム解析の終了宣言が出されてそろそろ6年を迎えようとしている。この間、ポストゲノム時代への突入として、医療分野での診断、予防、さらには創薬、遺伝子治療、再生医療への発展と大きな期待が持たれてきたわけである。そして、この間にも進歩は認められ、特に遺伝性疾患の原因遺伝子は多くの疾患で説明されてきた。しかし、治療という面にまで進展した例はまだまだ少ないと言ってもよかろう。特に腎臓領域では期待の大きさに比較して成果は少ないように思えるが、それは「腎臓」のもつ複雑な構造と機能に因るところが大きいからと思われる。

腎臓は障害が出現してもじわじわと進行することの多い臓器である。このように派手さはないが、代謝という極めて重要かつ複雑な機能を発揮する臓器である。すなわち腎臓は、小さな臓器であるにもかかわらず、水分・電解質・酸塩基平衡の調節、代謝産物の排泄、各種ホルモンの分泌や代謝など、生命維持に極めて重要な役割を演じており、その分、他の臓器に比較して極めて複雑な、微細な構造と機能とを備えもつという特徴がある。例えば、糸球体と尿細管といった異なる機能を持つ構造物があり、しかも互いに影響しあっており、さらに尿細管そのものが部位によって構造も働きも異なるといった複雑さを備えている。そしてその複雑さ故、腎臓を構築している細胞は、それぞれが機能分化した20種類にも及ぶといわれており、疾病の発生・進展・再生など、他の臓器や組織よりも解明が困難で、時間がかかっていることは否めない事実であろう。

しかし一方では、腎臓の機能の一部である老廃物の排泄や完璧ではないにしろ水・電解質の調節といった役割は、透析療法によって以前よりかなり立派に補われており、かつては尿毒症といわれて死を意味した荒廃する腎臓を持つ者が現在では救われて、30年以上にわたって生命を維持することさえ可能となっている。このように優れた代換え臓器は他に類



をみない。また臓器移植としても、他の臓器に先立って行われ、研究面でも数の上でも常に腎移植が先行してよい成績を残せたのも「腎臓」といった特殊な臓器であることと透析療法のあったことが理由であったと言えよう。

現在、本邦で透析療法の恩恵に与っている慢性腎不全の患者は約25万人にも上り、かつ年々1万人前後も増加して、医療経済に与えている影響は極めて大きい。この意味からは多くの進行性腎障害の進行阻止が重要であるが、現在われわれは高々数年間の進行遅延を可能とする方法(薬物療法や食事療法)しか持ち合わせていない。直ぐには根治治療は望めないまでも、この複雑な「腎臓」の現状を少しでも理解して、新たな挑戦を期待して書かれたのが本書であり、それぞれの執筆者の思いが伝わってくる良書である。最先端腎臓学を学ぶ書として是非とも活用して欲しく推薦するところである。

日本臨牀社 刊  
B5判・704頁 2006年2月発行  
定価14,910円(本体14,200円+税710円)  
雑誌コード 06916-02 送料450円